

二〇二五年度 大学入学共通テスト 解説 〈古典〉

第4問 古文 『在明の別』・『源氏物語』

〔出典〕

〔文章Ⅰ〕の『在明の別』は、平安時代末期の成立と見られる物語。作者は不明。鎌倉時代初期成立の『無名草子』(物語論を含む評論)や、鎌倉時代中期成立の『風葉和歌集』(有名物語に載る和歌を集めた和歌集)での扱いを見ると、平安時代末期には成立しており、当時は重要な物語の一つとして考えられていたことがうかがえる。

『在明の別』の最初に登場するのは、当時の左大臣の子息で、美しい容貌と優れた才能を持ち合わせた右大将であるが、実は女性が男装しているのであった(この設定は『とりかへばや物語』に似ている)。姿を消す術を身につけていて、さまざまな場所に自在に出入りし、こっそりといろいろな情報を聞き取ることができた。また、笛を吹くと奇瑞(吉兆を感じさせる不思議な現象)を呼び起こした(このあたりは『宇津保物語』に似ている)。右大将は、思わぬ妊娠に悩む左大将の娘を引き取って妻とし、生まれた子は右大将の子として育つが、この子が成長して、『文章Ⅰ』の「左大臣」となる。右大将は、その後、女性に戻って帝の中宮となり、産んだ皇子たちは次の天皇と東宮になる。

物語の後半、右大将の子の「左大臣」は、当時の右大臣の妹に当たる「中務卿宮北の方」(〔文章Ⅰ〕本文では「女君」と説明されている)と密かに契りを交わすが、その後、右大臣の強い要望で、その娘の「大君」(〔文章Ⅰ〕本文でも「大君」と説明されている)と結婚することになる。「左大臣との関係が途絶え、苦悩を深めていた」(〔文章Ⅰ〕本文前書き)「女君」は、「左大臣」の愛情を受けて子まで成した「大君」に対する嫉妬心が昂じて、ついに生き霊となり、「大君」に取り憑いて苦しめるのであった。その生き霊を「山の座主」の祈禱によって祓おうとしている場面が、〔文章Ⅰ〕である。

〔文章Ⅱ〕の『源氏物語』は、紫式部によって平安時代中期(一〇〇〇年頃)に書かれた五四帖からなる長編の物語。世界的な文学作品であり、後世の文学にも多大な影響を与えた。前半は主人公光源氏が多くの女性と関係を持ちながら栄華を極めていく姿を、中盤は愛する人々を失うなどして苦悩する光源氏の姿を、後半(宇治十帖)では光源氏のとを継ぐ世代の人々の姿を中心に描いている。

今回、〔文章Ⅱ〕として出題されたのは、第三五帖にあたる「若菜下」の巻の一節で、光源氏は四十歳代半ばである。「光源氏」(〔文章Ⅱ〕本文では「院」)の最愛の妻である「紫の上」(〔文章Ⅱ〕では「妻」と説明されている)が急病で倒れ、源氏の懸命の看病にもかかわらず、絶命しそうになる。かる

うじて蘇生するが、その時、その身から死霊が現れた場面が【文章Ⅱ】である。この死霊は、源氏の若い頃の恋人の一人であった六条御息所で、生前も生き霊となつて妊娠中の源氏の妻「葵の上」を苦しめたことがあった（本文の（注）9に書かれているのがこれである）。「ものの心苦しさをえ見過ぐさで、つひに現れぬる（＝源氏が苦しむ姿を見ていられなくて、姿を現した）」（38ページ2～3行目）などと六条御息所の霊が言っているのは、かつて恋人であった源氏への執着がまだ消えていないためであろう。

【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】、いずれの話でも、男性からの愛情が薄らいで苦しむ女性が、その男性が現在愛情を傾けている女性に嫉妬して、霊となつて取り憑いており、仏や祈禱の靈験によつて、霊が寄りまし「＝祓つた霊を乗り移らせるための人」に移されると、病んでいた女性が息を吹き返している。

### 【通 釈】

#### 『在明の別』

延暦寺の座主（＝最高位の僧）が、慌てて参上なさつた。（大君の）御枕元に（座主を）招き入れ申し上げて、右大臣が、御手をすり合わせて、仏にものを申し上げるかのようにして、「ただただ、もう一度、（大君と）対面させてください。大勢おります（子どもたちの）中で、どういう宿縁でしょうか、幼いころから（この娘を）またとなく大事に思うようになりまして、その親心の闇（＝子を思うあまりに分別を失うこと）を、まったく晴らすことができません」と、泣き惑いなさると、（座主は）たいそう静かに数珠を押し揉みなさつて、「令百由旬内、無諸衰患」と（法華経の一部を）読経なさっている御声が、はるかに澄んだ音で立ちのぼる心地がすると、（大君の）変わり果てて行く御様子が、少し持ち直して、（大君が）目をわずかに見開きなさつた。居合わせた人は皆、かえつて慌てふためいて、「やれ経を読め、やれ何よ」とうろたえなさるが、やはり（大君は）正気の人とも見えず、御容貌も変わってしまったようで、御本人とお見えにならない。たいそう美しく親しみやすくも見えるけれども、（何か）嫉妬しているかのような目もとの様子を、左大臣はさほど（普段と違うようにも）見分けなさらないが、お父上（＝右大臣）は、たいそう不思議なことに思い、「思いがけない人（＝女君・右大臣の妹）に似ていらつしやるなあ」と不可解にお思ひになる。すると、（大君が）体を動かして、

さまさまに…さまさまに（嫉妬心で）朝に夕に焼け焦げるように苦しく恨めしい胸の内を、どちらのほう（＝どちらの姫君）へ向けてしばらくの間でも晴らそうか。

とおつしやる様子は、少しも（大君）御本人ではなく、（女君に）間違いないのを、父大臣だけは、何度も「不思議なことだ」と首をかしげてしまいなさる。

そして、御自身の意識がおありでないので、（大君は）また消え入りそうになりながら、全く（この世に）とどまることができそうでもいらつしやるな

いが、(座主が)「もうひどい状態ではいらつしやりますまい」と(人々を)静めながら、(懸命の読経で)ひどくしゃがれてしまった御声を止めて、(今度は)葉師如来の呪文を繰り返してお読みになると、御もののけが(大君のからだだから)現れ出て、(座主はそのもののけを)小さな(寄りまし)「亵つた悪霊を乗り移らせるための人」の(子供に乗り移りなされた。(もののけが)大声を出して叫び続ける声に、(まさに)その時(大君は)御正気に戻られたのだろうか、人々が見つめ申し上げているので、「みっともない」とお思いになってお召し物を引きかぶって(顔を)隠しなされる。

### 『源氏物語』

院(＝光源氏)も、「ただただ、もう一度、(妻と)対面させてください。たいそうあつけなく臨終になってしまっているような時さえも見ないままになつてしまったことが悔しく悲しいので」とあわてなさっている様子や、(この世に)とどまることができそうにもない(奥様の)姿を見申し上げる(院の)気持ちなどを、ただ推量してほしい。たいそうつらい(院の)心のうちを、私も拝見なされるのであろうか、数ヶ月の間全く現れ出て来なかったもののけが、小さい(寄りまし)の(子供に乗り移つて大声で叫び続けるうちに、(奥様が)だんだんと息を吹き返しなされるので、(院は)嬉しくも、また、忌まわしくも思われてうろたえて取り乱しなされる。

(もののけは)すっかり退散させられて、(よりましの口を借りて)「人は皆(この場を)去れ。院お一人の御耳に申し上げよう。私のことを、この数ヶ月間、退散させようと苦しめなされるのが情けなくつらいので、同じことなら(このつらさを)思い知りなさっていただこうと思つたけれど、そうは言つてもやはり(ご自分の)命も持ちこたえられそうにないほどに身を粉にして取り乱していらつしやるのを拝見すると、今でこそ(私も)このようにあさましい(怨霊の)身を授かっていますが、(生きていた)昔の心が残っていてこそここまで参っているのですから、(院の)何かにつけての痛々しい御様子を見過ごすことができなくて、(私は)ついに姿を現してしまつたのですよ。決して知られまいと思つていたのに」と言つて、髪を振り乱して泣く様子は、まさに、昔ご覧になつたもののけの有様だと見えた。

### 「解説」

問1 語句の解釈の問題(選択肢がこれまでの五つから四つに減つた)

短い語句の意味を問う設問は、「センター試験」以来、「大学入学共通テスト」(以下、「共通テスト」)になつても、毎年度、問1で出題されている。重要単語(本年度はポイントとなる単語が簡単で答えやすい)・重要文法を確認し、必要に応じて前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア) 基礎

「いはけなくより」の解釈として最も適当なものを選べ。

「いはけなく／より」と単語分けされる。

「いはけなく」は、「幼い・あどけない」などと訳す形容詞「いはけなし」の連用形。「いとけなし・いときなし」でも同意。選択肢の中では、②の「幼い」だけがこれに相当する。「より」は格助詞で、用法的には①の「ので」、②の「から」、④の「よりも」の可能性があるが、「いはけなく」からの接続としては②「から」である。

よって、正解は②である。

正解 23 ②

(イ) 基礎

「なかなか」の解釈として最も適当なものを選べ。

「なかなか」は一語の副詞。

「なかなか」は、「かえって・なまじつか・むしろ」などと訳す副詞。選択肢の中では、①の「かえって」だけがこれに相当する。よって、正解は①である。

正解 24 ①

(ウ) 基礎

「呼ばひののしる」の解釈として最も適当なものを選べ。

「呼ばひ／ののしる」と単語分けされる。

「呼ばひ」は、「呼び続ける。何度も呼ぶ」、または「求婚する。言い寄る」(この意も重要)の意の動詞「呼ばふ」の連用形。この訳が正しそうなものは、③の「叫び続ける」であるが、④の「名前を呼んで」も保留。「ののしる」は、現代語の「ののしる」と同様に「非難する・悪口を言う」の意もなくはないが、古語としては「大声で騒ぐ。大騒ぎする」「評判が立つ。うわさする」の意が重要な動詞である。解答のポイントは、この「ののしる」の訳で、これが正しいのは③の「大声を出して」である。①の「悪口を言う」の意がないわけではないが、その意であるなら、古文単語としては問われない。

よって、正解は③である。

正解

25

③

問2 敬語(種類と敬意の方向)に関する説明問題 基礎 (選択肢は例年通り五つ)

波線部 a～c の敬語の説明の組合せとして最も適当なものを選び。

「共通テスト」になってからは、問2では概ね、語句・表現・内容等を問う問題が出題されており、敬語の問題が含まれることはあったが、本年度のように敬語だけを問う問題の出題は初めてである。ただし、「センター試験」まで遡ると、同じ形式での「敬語の種類」と「敬意の方向」を問う問題は、二〇一五年度など、過去に出題されており、また、「敬意の方向」だけを問う問題は、二〇二〇年度・二〇一九年度などに出版されている。

この形式に慣れていないと選択肢が難しく見えるかも知れないが、全選択肢で共通している箇所は、それが正しいことを意味していて、見比べる必要はない。

たとえば、a については、どの選択肢でも「書き手(作者)から」「尊敬語である」は共通しているから、これらの正しさを確認するのは無駄で、見比べるべきは、「山の座主へ」(①・②・③)と「左大臣へ」(④・⑤)である。これに気づけば、「令百由旬内、無諸衰患」と法華経の一部を「読みたまへ(＝読みなさい)」ているのは、僧である「山の座主」の可能性が高いから、すぐに選択肢を①・②・③に絞ることができるのである。

このようにして見比べるべき点はいくつかあるが、すぐに判断ができそうなのは、b「おはせ」の敬語の種類と、c「きこゆる」の敬語の種類、お

よび、敬意の方向である。

bの「おはせ」は、必修の動詞「おはす」の未然形で、「いらっしゃる・おありになる」と訳す「尊敬語」である。よって、この敬語の種類の説明が正しいのは②と⑤である。

一方、cの「きこゆる」は、これも必修の動詞である「きこゆ（聞こゆ）」の連体形で、「聞こえる・うわさする」という一般動詞としての意味もあるが、敬語としては「申し上げる・く申し上げる」と訳す「謙讓語」であるから、これが正しいのは②・③・④である。これで、正解はいずれもが正しい②となる。

また、地の文（会話文ではない箇所）で使われている敬語は、すべて「書き手（作者・筆者・語り手）からの敬意を表す」という敬意の方向に関する基本ルールを知っていれば、cの「きこゆる」も地の文にあるから、敬意を「人々から」と説明している①・⑤は正しくなく、「書き手（作者）から」と説明している②・③・④が正しいことがわかる。よって、これと、bの「おはせ」の敬語の種類とから考えても、正解は②であることになる。

このように考えれば正解は簡単に得られるが、あらためて、敬語の種類の覚え方・敬意の方向の考え方について説明し、それらを踏まえて、a～cの敬語について考えてみよう。

敬語の種類を理解するためには、まず、現代語の敬語をわかるようにすることが大事である。日常的に使って、「先生がいらっしゃった」「私が先生に申し上げた」といった使い方に慣れれば、「いらっしゃる」は敬意を払うべき人（偉く感じられる人）の動作を表すから尊敬語、「申し上げます」は敬意を払うべき人に対する自分などの動作を謙遜する言葉であるから謙讓語、とわかるようになる。それをふまえて、古文の敬語の訳し方を覚えれば、「おはす」は「いらっしゃる」と訳すから尊敬語、「聞こゆ」は「申し上げる」と訳すから謙讓語、と理解できるようになるのである。敬意の方向については、次のようなルールがあるので、覚えておかなくてはならない。

**まとめ** 敬意の方向のルール

◎ 「誰から」の敬意か

- ・ 地の文（会話文でない箇所）にある敬語は、作者（筆者・書き手・語り手）から。
- ・ 会話文の中にある敬語は、その会話主「話し手」から。

◎ 「誰へ」の敬意か

- ・ 尊敬語は、その動作の主体「主語」へ。

- ・謙讓語は、その動作の受け手「相手」へ。
- ・丁寧語は、その丁寧語を含む部分の聞き手へ。

(会話文中にある丁寧語は、その会話の聞き手へ。地の文にある丁寧語は読者へ。)

a 「たまへ」は、一般に「くださる・お与えになる」「おくなる・なされる」と訳す尊敬語「たまふ(給ふ)」（八行四段活用）の已然形である。ここは補助動詞。使われているのは「地の文」であるから、「書き手(作者)から」の敬意を示している。また、「尊敬語」であるから「動作の主体へ」の敬意を示すが、経を「読みたまへ」るのは、祈禱のために呼ばれた「山の座主」の動作であるはずだから、「山の座主」への敬意を示していることになる。

b 「おはせ」は、「いらっしゃる・おありになる」と訳す尊敬語「おはす」(サ行変格活用)の未然形である。使われているのは「会話文中」であるから「会話主(話し手)から」の敬意を示していることになるが、続きを見ると、この会話主は「いたく嘸れたる御声やめて、薬師の呪をかへすがへす読みたまふ(『読経で』ひどくしゃがれてしまった御声を止めて、薬師如来の呪文を繰り返してお読みになる)」のであるから、「山の座主」である。よって、「おはせ」は「山の座主」からの敬意を示していることになる。また、「おはせ」は「尊敬語」であるから「動作の主体へ」の敬意を示すが、「今はけしうおはせじ」は、祈禱をしていた「山の座主」が「大君」の容体を見て、「(大君は)もうひどい状態ではいらっしゃりますまい」と言っているのであるから、動作の主体は「大君」である。「けしう」は、「異様だ・普段と違う」などの意の形容詞「けし(怪し)」の連用形(ウ音便)。「じ」は、打消推量の助動詞である。よって、「おはせ」は「大君」への敬意を示していることになる。

c 「きこゆる」は、「聞こえる・うわさする」という一般動詞としての意味もあるが、敬語としては「申し上げる・申し上げる」と訳す謙讓語「きこゆ(聞こゆ)」（ヤ行下二段活用）の連体形である。使われているのは「地の文」であるから、「書き手(作者)から」の敬意を示している。また、「謙讓語」であるから「動作の受け手へ」の敬意を示すが、「人々まもりきこゆる」は「人々が(伏せている大君を)見つめ申し上げている」という意味であるから、動作の受け手は「大君」である。「まもり」は、「じつと見つめる」の意の動詞「まもる(目守る)」の連用形である。よって、「きこゆる」は「大君」への敬意を示していることになる。

以上のように詳しく見てみても、もちろん正解は②となるが、会話主が誰か、動作の主体が誰か、動作の受け手が誰かなどは、内容を正しく読解できていないと判断できない。よって、さきに見たように、簡単に判断がつくポイントに注目し、選択肢を絞っていくほうが、すばやく正解できるであろう。

正解 26 ②

問3 生徒の会話に関する空欄補充問題（選択肢は近年と同じく四つ）

Aさんのクラスでは【文章Ⅰ】を読んだ後、それが【文章Ⅱ】の影響を受けて作られたことを学んだ。次に示すのは、二つの文章の共通点と相違点について、生徒たちがグループ内で話し合っている授業の様子である。これを読み、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

複数の本文、もしくは、本文と引用文を比較して考える問題は、「共通テスト」になってからの新傾向の問題。また、複数の人物（教師・生徒など）の会話に関する問題も、「共通テスト」になってからの新傾向の問題で、二〇二三年度などにも出題があった。

(i) 空欄 X に入る発言として最も適当なものを選び。

応用

生徒Dは「【文章Ⅰ】では、童に移されたもののけが X」と言っています。「【文章Ⅱ】には、「もののけ」が言っている言葉が入ることになる。【文章Ⅱ】には二つの会話文があるが、前半の「ただ、し悲しきを」は「院」の会話文であるから、「もののけ」の会話は、後半の「人はみなし思ひつるものを」ということになる。そこで、この会話文と選択肢の内容が合致しそうなところを探すと、選択肢④の「自分がものけとなって取りついていることは知られたくなかったのに、光源氏のいたわしい姿を見ることができずに姿を現してしまった」が、会話文の最後の「もののけの心苦しさをえ見過ぐさで、つひに現れぬること。さらに知られじと思ひつるものを（何かにつけての痛々しい御様子を見ることができなくて、ついに姿を現してしまったのですよ。決して知られまいと思っていたのに）」に相当していることがわかる。

よって、正解は④である。

正解 27 ④

(ii)

空欄 Y に入る発言として最も適当なものを選べ。

標準

生徒Cは和歌の「朝夕こがす胸のうち（＝朝に夕に焼け焦げるように苦しい胸の内）」「いづれのかたにしばし晴るけむ（＝「その苦しさを」どちらのほうへ向けてしばらくの間でも晴らそうか）」に注目しているのだから、これらの意味と選択肢の内容が合致しそうなところを探すと、選択肢②の「激しい嫉妬によるつらさ」「それをぶつける先を求めている」が、それぞれ相当していることがわかる。よって、正解は②である。

正解 28 ②

(iii)

空欄 Z に入る発言として最も適当なものを選べ。

応用

生徒Dは「和歌の前後も考え合わせると、『文章I』では、『Z』と言っているので、まず、和歌の前を見ると「妬げなるまみのけしき、左の大臣はさやうにも分きたまはず、父殿ぞ、いとあやしう、『思ひかけぬ人にも似たまへるかな』と心得ず思さる」とあり、これは「嫉妬しているかのような目もとの様子を、左大臣はさほど（普段と違うようにも）見分けなさらないが、お父上（＝右大臣）は、たいそう不思議なことに思い、『思いがけない人（＝女君）に似ていらつしやるなあ』と不可解にお思いになる」という意味である。また、和歌の後を見ると、「くとのたまふけはひ、いささかその人にもあらず、違ふべくもあらぬを、父大臣のみぞ、かへすがへす『あやし』と傾かれたまふ。」とあり、これは「くとおつしやる様子は、少しも（女君）御本人ではなく、（女君に）間違いないのを、父大臣だけは、何度も『不思議なことだ』と首をかしげてしまいなさる」といった意味である。

左大臣は何も気づいていないが、「大君」の顔つきが「妬げなる（＝何かを憎んでいる・嫉妬している）」様子であるのを見て、父大臣（＝右大臣）だけは「大君」に「女君」が取り憑いているのではないかと感じ取っているのである。

ここでの「大君」の顔つきは「妬げなる」であり、「いささかその人にもあらず」なのであるから、これを「穏やかになって」としている①は正しくない。②の「苦しみに満ちたもの」は間違いとは言えないが、③「他の人に重なって」や、④「まるで別人のようになって」のほうが、より適当である。

また、「左の大臣はさやうにも分きたまはず（＝左大臣はさほど見分けなさらぬ）」というのであるから、①「左大臣はものけがまだ取りついていることに気づいていますね」、②「これほどまでに大君を憎むのは女君の仕業だと左大臣は気づいていますね」。③「右大臣と左大臣はそれが誰なのか怪しんでいる」は、いずれも正しくなく、④「左大臣は気づいていない」が正しいことになる。選択肢が長いので気づきにくいかもしれないが、「左の大臣はさやうにも分きたまはず」、「父大臣のみぞ……」に気づくことができれば、すぐに正解は④と決まる。

なお、右大臣についても、「『思ひかけぬ人にも似たまへるかな』と心得ず思さる（＝『思いがけない人』『女君』に似ている』と不可解に思う）」「違ふべくもあらぬを、父大臣のみぞ、かへすがへす『あやし』と傾かれたまふ（＝女君に間違いないのを、右大臣だけは不審に思っている）」とあるのだから、①「右大臣は大君が一命をとりとめたと思っている」、②「右大臣は着物を引きかぶって悲しみに暮れています」、③「女君だとは気づいていない」は正しくなく、④「右大臣はその様子がまさしく女君のものだと気づいていますね」が正しいことになる。

また、「大君」については、本文の最後に「今ぞ御心出で来るにや、人々のまもりきこゆるを『はしたなし』と出して御衣を引きふたぎたまふ」とあり、これは「(まさに) その時(大君は) 御正氣に戻られたのだろうか、人々が見つめ申し上げているので、『みつももない』とお思いになってお召し物を引きかぶって(顔を) 隠しなさる」という意味である。よって、①「ものけから解放されず、死を覚悟して出家を決意しています」、②「ものけから解放されずに亡くなってしまい」は正しくなく、③「ものけから解放されて我に返り、苦しむ姿を皆に見られなくなかったと思つてます」、④「ものけから解放された後、正氣を取り戻して気恥ずかしそうにしています」が正しい。

以上から、正解は④である。

正解

29

④

第5問 漢文 『論語』・皆川淇園『論語釋解』・田中履堂『学資談』

〔出典〕

【文章Ⅰ】 『論語』衛靈公第十五の三

皆川淇園『論語釋解』

『論語』は、言うまでもないが、孔子（前五五～前四七九年）とその門人たちとの問答や言行を記録したもので、儒家の根本文献である。孔子自身の著したものでなく、孔子の孫弟子以後の複数の人によって編まれたと考えられている。魏の何晏（二九〇～二四九年）による『論語集解』（古注）からさまざまな注釈書が出るようになったが、中でも、宋の朱熹（一一三〇～一二〇〇年）による『論語集注』（新注）が最も広く行われた。日本にも古く渡来し、江戸時代の伊藤仁斎（一六二七～一七〇五年）の『論語古義』や、荻生徂徠（一六六六～一七二八年）の『論語徴』などのすぐれた注釈書も多い。皆川淇園（一七三五～一八〇七年）は、江戸時代中期～後期の易学者、漢学者。とくに易学の研究者として有名で、教えを乞う者が三〇〇〇人に及んだといわれる。学問のかたわら、詩・書・画をもよくした。『論語釋解』は、『論語』の注釈書。

【文章Ⅱ】 田中履堂『学資談』

田中履堂（一七八五～一八三〇年）は、皆川淇園の弟子。『学資談』は読書論である。

〔書き下し文〕

【文章Ⅰ】

子曰はく、「賜や、女子を以て多く学びて之を識る者と為すか」と。対へて曰はく、「然り。非なるか」と。曰はく、「非なり。予は一以て之を貫く」と。

（『論語』による）

夫子蓋し常に子貢の夫子を称するの言を聞くに、多く諸経を学び、又能く強記して其の文を識り、因りて以て其の徳を成すを得る者と為すに似たり。是の故に夫子其の意を擬言して、以て之を訊ぬるなり。「曰はく、『非なり。予は一以て之を貫く』』とは、言ふところは学問の法、多を貪りて博に務め、龐雜冗乱にして、反つて其の智を聞くすべからず。唯だ一要道を得て之を主とするのみと。

（『論語釋解』による）

## 【文章Ⅱ】

淇園先師毎に書を読むを謂ふ、「日に数紙を読み了るは、日に数字を知り得るに如かず。此れ迂回到に似て、還つて甚だ便捷なり」と。余因りて又た云ふ、「万卷に粗渉するは、一卷に精通するに如かず。此れ狹隘に似て、亦た実は博達なり」と。世に多く書を読む者を謂ひて、以て博学と為し、輒ち之を欽羨す。是れは此れ多識にして、博と謂ふべからざるを知らず。博は通達せざる所莫きの謂にして、一書に精通するも亦た博学と称すべし。

(『学資談』による)

## 【通釈】

## 【文章Ⅰ】

先生(「孔子」)が言われた、「賜(「子貢」)よ、あなたは私のことをたくさんを学んでそれをよく覚えている人間だと思おうか」と。(子貢は)お答えして言った、「(はい)そうです。ちがうのですか」と。(先生は)言われた、「ちがう。私は一つのこと贯っている(のだ)」と。

先生(「孔子」)は、つねづね子貢が先生を称えている言を聞いて、(子貢が自分のことを)たくさんさんの経典を学び、またその内容をよく覚えていて、それによって人格を完成することができている人なのだと思っように見受けられた。それゆえ先生はそうした子貢の考えを推し量ってあのように尋ねられたのである。「(先生が)言われた『ちがう。私は一つのこと贯っている(のだ)』は、言いたいことは、学問の方法とは、多くのことを貪って博識であることに務め、雑然としてまとまりがなく、(それによって)かえってその智をおおうようになってはいけない(ということである)。ただただ一つの重要なことをつかみ、それを基軸とするだけだ(言うことである)。」

## 【文章Ⅱ】

淇園先生はつねづね書を読むこと(「学問」)について言っておられた、「日々数ページの文章を読み通すよりも、日々数文字の意味や用法を理解していくほうがよい。これは遠まわりなようで、かえってたいへんな早道なのだ」と。私はそこで加えて言う、「多くの書物に大ざっぱに目を通すよりも、一巻の書物に精通するほうがよい。これはせせこましいやり方のようにでいて、これまた実は広く到達する道なのだ」と。世間ではたくさん書物を読む人を称して、博学(な人だ)とし、つねにそういう人を敬いあこがれる。(しかし)それは多くのことを知っている(物知りだ)というだけで、(それを)博学と

言うことはできないということがわかっていない。博学とは（その物事に）行き渡っていないところがない（つまり、精通している）ことを言うのであって、（たとえば）一巻の書物に精通することも、これまた博学と言えるのである。

〔解説〕

問1 語の意味の判断の問題 (ア) 基礎 (イ) 基礎 (ウ) 基礎

波線部(ア)～(ウ)のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「女」は、「をんな」ではない。「汝・若・爾・而」などと同じく「なんぢ」と読み、目下の者（この場面は「弟子（門人）」に対する二人称である。「おまえ。そなた」と訳すことが多いが、「あなた」でもよい。正解は③「あなた」。

(イ)「非与」は、「非なるか」と読む。子貢の問いに対する、後の孔子の応答に「非なり」とあることがヒントになる。「非」は、「あやまり。正しくないこと（↓是）。否（そうではない）」の意。「与」は、「乎・哉・也・邪・耶・歟」と同じ、疑問・反語の「や・か」。ここは、先生に尋ねている部分であるから疑問で、「非（体言）か」「非なる（断定の「なり」の連体形）か」、あるいは「非なり（断定の「なり」の終止形）や」の読み方が可能である。正解は①「ちがうのですか」。

(ウ)「毎」も、「女」同様、読めるかがポイント。「つねに」である。読めれば、正解は④「つねづね」。

①「たまたま」は、「偶・適・会」など。

正解 (ア) 30 (イ) 31 (ウ) 32 (各4点)

問2 傍線部の理由説明問題 応用

傍線部A「夫子擬言其意、以訊之也」について、孔子が子貢の考えを「擬言」して訊ねた理由を筆者はどのように推測しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

まず、傍線部の直前の「是の故に（＝このため。それゆえ）」に着眼する。それゆえ傍線部のようにしたのであるから、傍線部のようにした「理由」

は、「是の故に」の前に述べられていることになる。

選択肢①～④冒頭に共通している、「子貢の日頃の言動には」は、「常に子貢の夫子を称するの言を聞くに」、また末尾に共通している「と考えているふしが見受けられた」は「…と為すに似たり」が相当する。ということとは、「多くの諸経を学び、又た能く強記して其の文を識り、困りて以て其の徳を成すを得る者」の解釈がポイントということである。ここは、「たぐさんの経典を学び、またその内容をよく覚えていて、それによって人徳を完成させることができた人だ」というような意味になる。

ここが、『論語』の「多く学びて之を識る者」に相当している。この内容を正しくカバーできているのは、④である。要領の点から言えば、解釈の問題ではないのであるが、「困りて以て」の訳出が一つのポイントで、これだけでも④である。③の「～ことでも許容範囲であるが、後ろの、「有徳者を心服させた」が違っている。

- ①は、「～よりも～」がキズ。「人徳の完成を追求している」もキズである。
- ②も、「～のは～」がキズ。「学者としての名声を獲得するため」もキズである。

- ① 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚えることよりも、人徳の完成を追求しているのだ」と考えているふしが見受けられたから。
- ② 子貢の日頃の言動には、「先生が古典を多く学んでその内容をよく覚えるのは、学者としての名声を獲得するためだ」と考えているふしが見受けられたから。
- ③ 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚えることでも、有徳者を心服させたのだ」と考えているふしが見受けられたから。
- ④ 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚え、それによって、人格を完成させたのだ」と考えているふしが見受けられたから。

正解 33 ④ (7点)

問3 傍線部の解釈の問題 標準

傍線部B「日<sub>レ</sub>読<sub>コ</sub>了<sub>レ</sub>数紙、不<sub>レ</sub>如<sub>三</sub>日知<sub>コ</sub>得<sub>レ</sub>数字。」の解釈として最も適當なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

各選択肢冒頭に共通している、「漢文の書物を読むうえで」は、「解釈」上の補いである。

ここは、「比較の公式」に気がつかなければならぬ。

A<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>B<sub>ニ</sub>

【読】AハBニシカズ

(若) 【訳】AはBには及ばない

AよりもBのほうがよい

傍線部で、右のAにあたるのは、「日<sub>ニ</sub>に数紙を読み了ふる」、Bにあたるのは、「日<sub>ニ</sub>に数字を知り得る」である。つまり、「日<sub>ニ</sub>に数紙を読み了ふる」よりも、「日<sub>ニ</sub>に数字を知り得る」ほうがよい、と言っていることになる。とすると、①・②が正しく、③・④は逆になると判断できる。

「日<sub>ニ</sub>に数紙を読み了ふる」は、②の「日々数ページの文章をただ読み通す」のほうが、①の「何度も音読する」よりもよい。

「日<sub>ニ</sub>に数字を知り得る」も、②の「日々数文字の漢字の意味や用法を理解する」のほうが、①の「句を確実に覚えていく」よりもよい。

正解 34 ② (6点)

問4 返り点の付け方と書き下し文の組合せ問題 標準

傍線部C「博者莫所不通達之謂」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適當なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

この形式の問題は、「センター試験」時代から頻出する形式なのであるが、ポイントは、傍線部の中に、再読文字や、疑問・反語・否定・使役・受身など、何らかの句法上の読み方の特徴がないかということと、書き下し文のように読んだときの文意が通るか、また、その文意が前後の文脈(話の流れ)にあてはまるかどうか、である。返り点は、本当はそのような返り方(付け方)が文の構成上アリなのか? ということはあるのであるが、ともかく読み方どおり返っているようにしているケースがふつうなので、返り点の付け方をチェックするのは時間の無駄である。

まず、「句法上のポイント」からいえば、「所」をはさんではいるが、「莫不…」の二重否定がある。

莫<sup>シ</sup>(所)不<sup>ル</sup>レ<sup>セ</sup>A

- 【読】 Aセズル(ところ) なシ  
 【訳】 Aしない(ところの) ものではない

ただ、この点では、①以外の、②・③・④は「…ざる所莫き(莫し)」と読んでるので絞り切れない。次に、それぞれの書き下し文のように読んだ時に、「文意」がとれるかである。

- ①は「博とは行き渡っていないところの意味(理由)がなく」
- ②は「博とは行き渡っていないところが無いという意味であって」
- ③は「博とは行き渡ることが言わないところがなく」
- ④は「博とは行き渡ることをこれ言わないところがなくて」

直前部からの、及び直後への「文脈」に「文意」があてはまるかどうかも含めても、正解は②である。

「謂<sup>いひ</sup>」は、「意味。趣旨」、あるいは「理由。わけ」「名称。呼び名」の意。

正解 35 ② (6点)

問5 語(「又・亦」)の意味・用法の問題 a 基礎 b 基礎

二重傍線部 a「又」、b「亦」と同じ意味で用いられている「また」として最も適当なものを、次の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。

「また」と読む字(語)の用法の違いを判断する問題で、近年では比較的珍しい形である。

「また」と読む字には、次のようなものがある。

問6

【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の内容(趣旨) 把握の問題 応用

【文章Ⅰ】から読み取れる皆川淇園の学問に対する考え方と、【文章Ⅱ】から読み取れる田中履堂の読書に対する考え方を説明したものと最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の読解をふまえた「内容合致問題」であるから、各選択肢をチェックして、キズを見つけて消去法で解いてゆく。「キズ」とは、次のようなものである。

- a. 選択肢に書いてあることが、本文の中にない。
- b. 選択肢の中に、本文に書かれていないことがある。
- c. 本文と似たようなことが書いてあるが、ズレている。
- d. 本文の内容に比べて、言い過ぎていたり、言い足りない。
- e. 人物や事柄の評価のプラス・マイナスが間違っている。
- f. 内容的に常識をはずれている。
- g. 漢文の世界にありがちな正しいこと、良いことが書いてはあるが、本文とは関係ない。

- 又……その上。さらに。重ねてまた。  
 亦……「…モ亦タ」の形が多い。…もまた。  
 復……再び。もう一度。いったい。さらに。  
 還……再び。めぐりめぐって再び。もう一度。
- aの「又」は、「その上」「さらに」の意で、④の「そのうえまた」が相当する。
- bの「亦」は、「…もまた」の意で、③の「運もまた」が相当する。
- ①の「またとない」は、字を当てはめれば「又とない」ではあるが、意味的には「二度とない」である。
- ②の「または」も、字を当てはめれば「又は」であるが、意味は、「あるいは」。もしくは「の意である」。
- 正解 a 36 ④ a 37 ③ (各3点)

右のポイントに留意しながら、各選択肢を見てみよう。

① 皆川淇園は、学問では、要点をまず把握し、それに基づいて個別の事柄を分析すべきだと説いている。田中履堂は、読書によって多くの具体的な事柄を知って、それら全てを貫通する法則を発見することが大切だと説いている。演繹的に学ぶのか帰納的に学ぶのかという点で、両者の考えは対立している。

② 皆川淇園は、学問では、鍵となる部分を素早く見極めて、それを広く適用して要領よく学ぶべきだと説いている。田中履堂は、一冊の書物を精読することを通じて、学問の土台をじっくりと築くことが大切だと説いている。学びにおいて効率を重視するのか否かという点で、両者の考えは対立している。

③ 皆川淇園は、学問では、精密な分析を通じて、現実の問題に應用できる原理を抽出すべきだと説いている。田中履堂は、現実の問題の解決につながる知識を集積するためには、様々な分野に関係する書物の熟読が大切だと説いている。学びにおける実用性を重んずる点で、両者の考えは通底している。

④ 皆川淇園は、学問では、雑多な知識に惑わされないように、基軸となる要点を把握すべきだと説いている。田中履堂は、多くの書物を乱読するよりも、一冊の書物を隅々まで深く理解することが大切だと説いている。学びにおいて多くの知識を得ることに重きを置かない点で、両者の考えは通底している。

④以外は、ほぼ全面的にキズである。

正解

38

④

(8点)